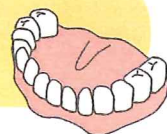


ジョージ・ワシントンの入れ歯は1.3Kgだった!?

入れ歯の歴史

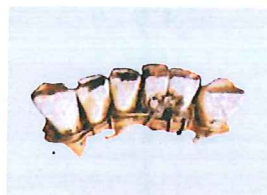


昔の人たちはどうやって抜けてしまった歯のトラブルを解消してきたのでしょうか？
今では信じられないような話を紹介します。

紀元前の古代エジプト、ギリシャでは金の帯状の板で動物の歯や骨を縛ったものを残存している歯に縛り付けていたようです。現代のブリッジのようなものですが、出土したものを見る限りでは実用性には乏しかったと思われます。推定紀元前2500年のものが現存する世界最古の補綴物※です。

※補綴物(ほてつぶつ)…口の機能を回復する人工物

金製のバンドで
固定したブリッジ



◀歯を針金で固定したもの

1800年頃の西洋では、動物の骨や象牙を削って組み合わせた入れ歯を使っていました。噛むことはできず、見た目だけ回復するものです。貴婦人たちは入れ歯を外して自宅で食事を済ませてから晩餐会に出掛けました。動物の骨などで作った入れ歯は腐敗臭を放つので、香水をたっぷりつけて扇子で口元を隠しながら会話を楽しんでいたようです。

アメリカの初代大統領ジョージ・ワシントンは何個も入れ歯を作ったようです。大統領になった時には、歯が1本しか残っていませんでした。その時の入れ歯は鉛製で表面を蜜ろうでコーティングし、鹿の歯と人間の歯(自分のものだったそうです)がそこに並んでいました。総重量はなんと約1.3Kg!! 想像を絶する重さです(現在の総入れ歯は大体20gぐらいです)。その後の入れ歯も、上が金の土台(歯茎の部分)、下は象牙の土台。人工歯はカバの歯を彫刻したもので上下の入れ歯はバネで繋がっていたそうです。



日本最古の木床義歯

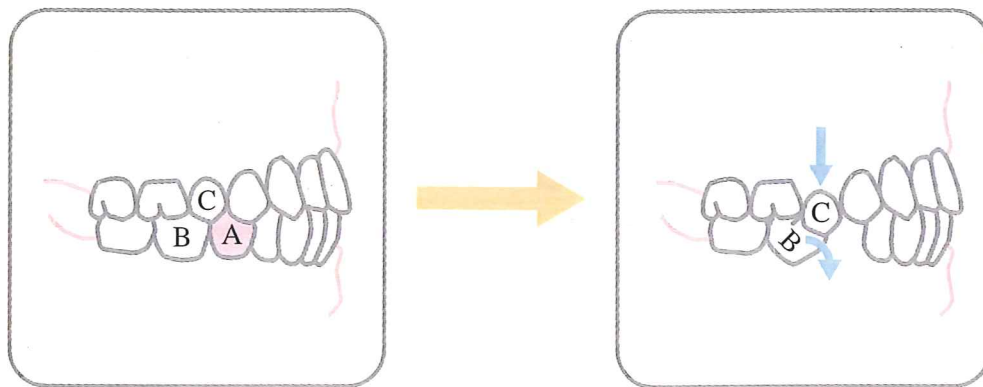


室町時代の日本では、つげの木から職人が削りだして作りました。これが日本最古の総入れ歯で、口を開けても落ちることなく食事でもできたようです。当時、精巧な印象技術(口の型をとること)はなかったので、蜜ろうや松ヤニを混ぜたもので型をとり、それに合わせて木を削りました。最終的には、患者の口に直接合わせながら削ったようです。製作はとても困難だったと思います。人工歯には、ろう石や動物の骨、人間の歯を使っていました。現在は石膏模型(型から口の中を再現したものです)の上で製作しますが、模型と最新の器具を使っても木製の入れ歯を作るのはとても難しいでしょう。この時代にこれを作った人は入れ歯の神様と言ってもいいと思います。

明治以後、西欧からゴム製の入れ歯が伝わりました。人工歯には陶歯(せともの)が使われるようになり、腐敗臭はしなくなりましたが、床がゴムのため臭いがしました。大正時代になっても、入れ歯は一部の階級の人しか入れられない高級品だったそうです。

昭和初期、ドイツからアクリル系樹脂が伝わり、入れ歯は飛躍的に進化しました。ゴムに代わって床の部分がアクリルに変わり、臭いがほとんど無く、劣化も少ない入れ歯が作れるようになったのです。その後、アクリル系の入れ歯は保険適応となり、多くの人が使用できるようになりました。現在の材料は更に進化し、金属などを使用することによって精度、耐久性が向上しています。

このように昔から歯が抜けると、元の状態に戻すためにいろいろな工夫をしてきましたが、入れ歯は食物を噛めるようにするだけではなく、歯並びを維持するためにも役立っているのです。なぜ歯が抜けると大変なことになるのか？ そのメカニズムを説明したいと思います。



まず、歯(A)が抜けると、その隙間を埋めようとして隣の歯(B)が倒れてきます。真横に移動せずに倒れてきますので歯は斜めになり、対する上の歯(C)も隙間が埋まるまで同じように伸びてきます。

歯の動きが落ち着いたころには歯並びがガタガタになってしまうのです。歯並びが変化すると歯磨きがしにくいので虫歯になりやすいです。今までと同じようにあごを動かすことができなくなるので噛みにくくなったり、発音に支障が出ることもあります。ひどくなると顎関節症といって口が少ししか開けられなくなったり、全身に不調が及ぶこともあります。たった1本の歯が抜けただけで全身に影響が出るなど信じられないかもしれませんが、精密機械のねじが1本外れると動かなくなるように、人間も精密にできているのです。

歯が抜けたときはもちろん、少しでもトラブルがあった場合は、症状が進行する前に歯科医院にかかることをお勧めします。



第二診療部 技工科 蒲原 政英